Forest通信 令和6年2 No.420

林野庁　関東森林管理局　高尾森林ふれあい推進センター

巻頭 Photo

高尾山のいきものたち

スギタニルリシジミ（シジミチョウ科）

春一番に見られる蝶。翅の長さが1.5cm程と小さく、閉じた裏面はやや暗い灰色で目立たないが、翅を広げると光沢のあるやや藍色を帯びた青色が輝く。山地の落葉広葉樹林に棲み、成虫は、4月頃のみに発生し、その間に繁殖活動をし、卵を産む。

日中、樹冠部の高い所を飛翔するが、日当りのよい地上近くをチラチラと飛ぶことも多く、日光浴や花への吸蜜、地面での水分補給や動物の糞にも集まる。食樹はトチノキで、幼虫は、葉ではなく5月頃から咲く花や蕾を食べて成長する。花が終わる6月頃には蛹となり、そのまま翌春まで待つ。生息地もトチノキがある渓流沿いが多い。まだ寒さが残り緑も少ない山間で、春の到来をつげる小さな蝶だ。

（写真・文　森林インストラクター　藤原 裕二）

高尾陣馬特別警戒

（高尾山から富士山を望む）

毎年、大晦日の夜から元旦の朝にかけて、高尾山では東京都、八王子市、警察、消防、東京神奈川森林管理署及び当センター等で組織する「高尾陣馬特別警戒連絡協議会」の夜間パトロールを行いました。東京神奈川森林管理署と当センターから合わせて７名の職員が参加し、担当区間である高尾山山頂から小仏城山間の参道を警戒しました。当日は昨年と比べて寒さも和らいだことから多くの登山者と見込んでいましたが、今回は約100人を確認し、昨年の約430人に比べるとだいぶ少なくなりました。昨年は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言により自粛を余儀なくされた後の年でもあったことから、新年の初日の出を求める登山者が多かったのではないでしょうか。今年も山頂では深夜にもかかわらず山頂を埋め尽くさんばかりの多くの方が初日の出を待つ姿が見られましたが、特に危険行為や遭難、火災などは確認されませんでした。明け方（午前６時５０分頃）には初日の出がはっきり確認できると歓喜に包まれるとともに、雲ひとつなく朝日を浴びた富士山の姿もはっきりと確認でき、無事に任務を完了しました。（久）

（特別警戒中の職員）

（高尾山山頂付近からの初日の出）

富ちゃん 皿ちゃんの

俺の高尾

NO.79

梅
（バラ科）

「梅一輪　一輪ほどの　暖かさ」松尾芭蕉の弟子、服部嵐雪が日ごとに春めいてくることを詠んだ句です。梅は和歌や俳句などに多く読まれ、日本人には桜とともに親しまれている樹木です。

原産地は中国で、一説には日本への渡来は弥生時代に朝鮮半島を経て入ったものと考えられているようです。 名前の由来には、中国音「メイ」、ウメの実から作る薬「烏梅（ウバイ）」からなど諸説があるようです。

高尾にも木下沢梅林など多くの名所がある落葉高木で、品種は三百種類とも五百種類ともいわれる。花の観賞を目的とした「花ウメ」と、実の収穫を目的とした「実ウメ」に大別されています。

材質は強靭で、割裂しにくいのですが大きい材が採れないため、器具材、櫛、数珠、そろばん珠、将棋の駒、箸などの小細工物として使われています。（皿）

驚き桃の木
高尾の記

NO.15

「鉢植えのキジョランが大変なことに!!」

３年前に高尾山で拾った種から育てているキジョランが直径３０センチほどの小さな鉢に植えられているにもかかわらず、２年目あたりからぐんぐんと伸び、仕方がないので２メートルぐらいのところでてっぺんを切りました。３年目の昨年夏に初めて実が一つ付きました。

１０月の終わりになって何気なく葉を見ると見慣れた丸い穴が。「まさか!?」と思って裏を見ると、何と例のチョウの幼虫が全部で１５頭ほど張り付いているではないですか！成体を見たことは一度もなく、一体いつどこから飛んできてこの狭い庭の食草を見つけたのか、ただただ驚くばかりです。その後幼虫はぐんぐん大きくなり、それと同時にキジョランの葉がだいぶ食べられて少なくなってしまいました。今年は新芽が出るのでしょうか、そちらも心配です。

暮れに寒くなってきたので、家族の反対を押し切り鉢ごと一畳ほどの狭いサンルームに入れました。そしてこの原稿を書いている１月に見事に蛹化、それも葉裏ではなくサッシの枠にぶら下がっている輩もいました。

さて、この後どうなるでしょうか、次号をお楽しみに！（枝）

公募イベント
森林カレッジ（冬）

年も改まった令和６年１月１３日（土）、日影沢キャンプ場の管理棟や園地の炭焼小屋において森林カレッジ（冬）を開催しました。

当日は、厳冬期の寒さとインフルエンザやコロナ蔓延の影響等もあり６名の参加者にとどまりましたが、風はそれほど強くはなくまずまずのコンディションでの開催となりました。

年4回のカレッジは今回が最終回です。キャンプ場の管理棟前で開会式を実施し、みんな揃って炭焼小屋へ歩いて移動しました。

炭焼き小屋で職員による伏せ焼きによる炭焼きについて説明を聞いたのち、皆で協力しながら窯の作成に取り掛かりました。

まず四角に掘った土窯の中に丸太や鉄筋で竹を置く床形を作り、煙突を取り付け、材料の竹材を敷き詰めて隙間を落ち葉で埋めていきます。次に窯の上部にトタン板で蓋をしてから土で埋めていきます。そしていよいよ火入れとなります。予め用意していた焚火の炭火を焚口に置き、薪を追加して団扇で仰いで熱風を窯の中へ送ります。約２０分前後で白い煙が勢いよく出てきたら一段落。あとは煙の色や温度を確認しながら窯締めを待つことになります。

お昼はキャンプ場の管理棟で頂き、午後からは、「森林の恵みと共に－炭焼き、そして森林の香り－」と題し、東京大学名誉教授の谷田貝光克先生による講義を受けました。講義後、受講生からは「日本人が育んできた炭の文化のお話を聞いて、その多様さ素晴らしさ等たいへん驚きました」、「炭の効果等知ることができてたいへん勉強になりました」などの感想が寄せられました。

講義の後は、松ぼっくりやドングリの実、木の葉などを菓子缶に入れ、半割ドラム缶の焚火台で焼いて「花炭」を作成しました。

閉会式では、受講生に小さな木枠付きの修了証書を授与した後、希望者を募って炭焼き小屋へ戻り窯締めを行い今年度最後の森林カレッジは幕となりました。

今回は残念ながら参加者が少なく盛況のうちに終了とはなりませんでしたが、参加された方は、事前に焼いておいた竹炭や花炭をお土産として持ち帰ることができ、笑顔で帰路についていました。（瀬）

2024年度
森林カレッジ
受講生募集

年3回参加いただきます。
それぞれの季節を通じて森林について学習＆実習をします。

応募は４月１９日(金)まで

⇊ 応募はこちらのサイトから ⇊

公式ホームページ
主催イベント
詳細情報→

1

日程　令和６年５月１８日（土）
内容　講義「森林の見方」
体験　森林散策
講師　元日本森林学会会長
　　桜井　尚武　氏

2

日程　令和6年7月２０（土）
内容　講義（テーマ未定）
体験　草刈り作業など
講師　（株）モリアゲ代表
　　長野 麻子　氏

3

日程　令和６年１２月１４日（土）
内容　講義「森林の恵みと共に
　　～炭焼き、そして森林の香り～」
体験　炭焼き作業
講師　東京大学名誉教授　谷田貝　光克　氏

編集後記

１月の半ばぐらいまでは高尾は別世界の寒さでしたが、今年は暖冬？のようで、日影沢キャンプ場に行く旧街道沿いは白梅や紅梅が見ごろとなっています。

ウメ

Forest通信　NO.420
発行：林野庁関東森林管理局
　　高尾森林ふれあい推進センター
ご意見・ご要望・イベントのお申込み・お問合わせ先
　高尾森林ふれあい推進センター
〒193-0844　東京都八王子市高尾町2438-1
TEL 042-663-6689
E-mail:ks_takao_postmaster@maff.go.jp
http://www.rinya.maff.go.jp/kanto/takao/index.html